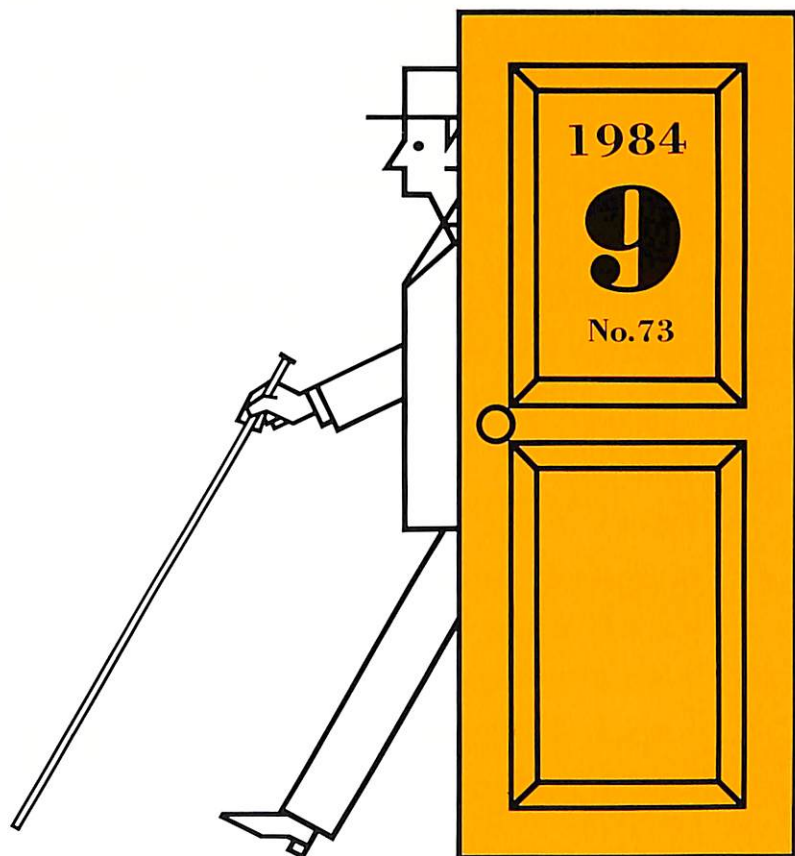


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和五十九年八月一五日 SSK通巻第二三八号(毎月六回、5の日、0の日発行)

視覚障害

その研究と情報

特集＊リハビリテーションの現状と課題



ISSN 0385-7476

SSK

新刊案内

人と業績 —— 盲先覚者の偉業をたずねて

川 野 楠 己 著

定価 1,200円

(送料別 300円)

NHK「盲人の時間」のディレクターが、取材から得た感動を、そのままぶつけた力作です。

6人の盲先覚者の生きざまが、そのまま読者に伝わってきます。

永年、盲関係の図書を発刊してきた本会が、自信をもっておすすめできる書です。

葛 原 勾 当 箏 曲 家

森 恒 太 郎 元 余 土 村 村 長

平 方 龍 男 は り 師

中 道 益 平 元 光 道 園 園 長

後 藤 寅 市 前 北 海 点 字 図 書 館 長

金 成 甚 五 郎 元 和 歌 山 県 立 盲 学 校 長
元 日 本 盲 人 会 連 合 会 長

お申し込みは

日本盲人福祉研究会

目 次

1984年 9月 No.73

2 ページ評論	清水 学	2
---------	------	---

特集 リハビリテーションの現状と課題

視覚障害者リハビリテーションに関する研究と開発	田中 一郎	5
視覚障害者のリハビリテーションの現状	中村 哲夫	16
視覚障害者のリハビリテーションの課題	辻内 弘	27
視覚障害者の生活訓練施設および 実施機関一覧		34

ボランティア西・東

さわる絵本づくりにはげんでいる人たち		38
--------------------	--	----

この人と語る

弱視教育の真髄はこれだ	村中 義夫・山県 浩	45
-------------	------------	----

イギリスの盲学校	田中 農夫男	58
----------	--------	----

インフォメーション・コーナー		65
----------------	--	----

書 評		75
-----	--	----

編 集 後 記		80
---------	--	----



訓練生はリハチームの一員である

社会福祉法人 全国ベーチェット協会 江南施設 清水 学

今日視覚障害者のリハビリテーションにおいて医師、カウンセラー、訓練士などの専門職員から成るリハビリテーションチームによるリハビリテーションプログラムの運営は一般的になりつつある。しかし、そこに障害者である訓練生自身が参画することは希であろう。各訓練生に個別のリハプログラムを作成するに際して訓練生自身の意見は無視できない重要な要素である。訓練生は自分の知らないところで評価作成されたプログラムに従うのではなく、リハチームの一人として初期評価の段階から自分自身の希望、ニーズ、問題点などを提起し、それらについて専門職員とともに分析検討し、協同してリハプログラムの作成にあたることが望ましい。そこでは訓練生は評価検討の対象であると同時に、自分自身のリハプログラムの決定権を持つ一人である。リハビリテーションの運営に参加することにより訓練生は自分自身をより客観的にとらえ、訓練やリハゴールを自ら考え選択する。訓練生がリハチームの一員として自分自身のリハプログラムの作成検討に参加しているとの自覚を持つことが、彼の自立への第一歩である。

しかしながら、これは容易に実行できることではない。リハビリテーションは一面で障害者である訓練生を援助あるいは指導する過程であり、そこでは援助の受け手と授け手という上下関係が生まれやすい。訓練生と専門職員は生徒と先生あるいは子供と大人のような関係になりがちである。職員が訓練生との会話の際よく口にする命令口調や子供に対する時のような言葉づかいはこの関係を示すものである。医療ニーズの高いベーチェット病や糖尿病患者の多い私

の施設ではさらに医師と患者のような関係も見られる。また、専門職員は自分の知識や経験を過信するあまり、訓練生の意見を軽視した一方的な知識や技術の教授に終始する危険を持っている。知識や経験をひけらかす権力者としての専門職員の下では、訓練生は従属者となり職員の指示に忠実に従いまじめに訓練にはげむ「良い訓練生」たろうと努力する。さらに現実的な問題として、訓練生をリハビリプログラムの運営に加えることには話し合いや情報の提供などに専門職員だけの場合に比べより多くの時間が必要となり、職員と訓練生の比率が低い現在の施設体制では実施が困難である。また視覚障害者のリハビリテーションの根幹をなす社会適応訓練と三療師の養成を中心とする職業技術訓練が未分化な現状も訓練生の自主性や個性がおろそかにされている一因かもしれない。

以上のような背景をもつ失明者更生施設では専門職員は、職員と訓練生の「対等な人間関係」およびリハビリプログラム運営への「訓練生の参加」の重要性とそれらを妨げる諸要素を充分認識し職務にあたらなければならない。専門職員は日々の訓練や評価において、自分の持つ知識や、訓練生に関する情報がいかに徹々たるものかを認識し、判断に際しては訓練生の意見を尊重し独善に陥らぬよう細心の注意を払うことが大切である。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

— 編 集 後 記 —

今回は、リハビリテーションを特集してみました。課題の大きさと、遅々として進まぬ問題解決に、あらためて考えさせられました。国際障害者年の後期行動計画が作られつつある今、障害者のリハビリテーションなどは、飛躍的に向上しても良いのではないのでしょうか。

この5月から始まった「ボランティア西・東」のコーナーも、早いもので3回目となりました。ボランティア活動を続けて下さっている皆様に、いくらかでもお役に立っているでしょうか。ご意見やご希望がありましたら、ぜひ編集部あてお寄せ下さい。

(平 重真)

視 覚 障 害

1984年 9 月 No.73

年間購読料 3,000円 (送料とも)

発行日 1984年 9 月 1 日

編集人 (連絡先)

日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒160 東京都新宿区高田馬場1丁目
日本点字図書館内 23番4号

電話 (03) 200-1130

振替口座 東京 6-16103

発行人 身体障害者団体定期刊行物協会

〒157 東京都世田谷区砧8-21-3

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13
電 話 (624) 6111 (代表)

協賛団体 日本点字図書館